

□11月26日主日礼拝説教短縮版(隅野徹牧師)
「目に見えない収穫をもたらすために」(I コリント3:1～

コリントの信徒達は、パウロやアポロという教会の伝道者を神以上に重要視してしまい、その結果教会で問題を起こしてしまいました。「自分自身が〇〇先生によって育てられた優れた実りだ」と考えることによって、自分はずでに完成品だという考えに陥り、この先成長しようという思いが欠如してしまったと私は理解します。自分を立派な実りだと捉えるのではなく、枝や畑のように、良い実りをもたらすものとして捉えることが大切です。そのことによって、私たちはこれからも実りを生み出すものとして歩いていこう、と成長を願う私たち一人ひとりになれるのではないのでしょうか。

自分は実りだと捉えるのは受け身の生き方ですが、自分は枝や畑だと捉えることによって、能動的な生き方へと導かれます。そして神の畑である自分が神と共に歩むか、離れて歩むかによって、結果が分かれてしまう可能性があることを、パウロはここで伝えようとしていると私は読み解きます。

また神の働き場である、いわば「神の畑」である一人ひとりを手助けするためにパウロやアポロはいるのだ、ということがここで教えられているのです。実りを生み出す畑は信徒なのであり、教師ではないということがはっきりと教えられています。具体的には6節にあるとおりです。

神の畑であるはずのコリントの信徒たちに、キリストの十字架と復活による喜ばしき知らせの種を植えたのがパウロであり、それが育つように水をやったのがアポロです。しかし何より大切なのは、この世の成果とは違った、神の愛に基づいた実りをもたらす存在である一人一人と、神・キリストの関係なのです。実りを生み出す畑は信徒であり、教師ではないのです。皆様ご自身が神の働き場、神の畑であることを覚え、教会の教師の助けを借りながら、神の畑として実りを生み出していただくことを願い祈ります。(終)